

大自然母なるぬくもりにかゝる

幸せってなんだろう

現代は馬鹿騒ぎと馬鹿笑いが多いといわれる。テレビを見てみると痛感します。ほほえむ人が少なくなりました。ほほえみは幸せの表現です。無心無邪気の表情です。赤ちゃんがそうだ。ほほえんでニコツとします。それを見るだけでほほえんでしまいます。

円空さんや木喰上人の仏像を見てください。なんともいえないほほえみです。彫った人たちの生活は、いまと比べれば極貧の極貧という生活でした。それでもあの表情を彫ったのです。ナター丁ノミー丁で生

涯12万体の仏像を彫ることを発願し全国を巡り歩いた円空さん。その表情には思わずほほえみを誘われます。

独りでいると寂しい。それを紛らわそうとしないしていると「寂び」になります。寂しいのではない。寂しさに親しむ。それがほほえみになる。「寂しいなあ」とそこにいる。心は満たされていつのまにか独りで納得してしまいます。

あるがままに

ところがいまの世の中、寂しいとケータイ、テレビ、ゲームに走ってしまふ。心の底からは喜べない。刺激がエスカレートしていきただけ。そのあげく、蹴飛ばしたり、火をつけたり、最後は人や動物を殺してみたくありません。坐禅をしていると、自分の息づかいだけで法悦にひたれます。自

分の息づかいに満足できず、次々に心を紛らわしていくと、幸せは遠のくばかり、悩みは深まるばかりで心がすさみます。

「バカヤロウ」と怒鳴られたとき、3通りの反応があります。そのひとつは、「ナニヲ、テメエ」と相手を問題にする。争いになります。その次が、「俺が悪かった。よく注意してくれた」と自分をなだめる。これは前よりも穏やかだが、本当の宗教心ではない。ハツとする、それをなだめようとか、手ならししようとするのは自分のはからいです。道徳の範囲です。言葉をつなげていかなないで、あるがままを受け入れること。はじめは、「癪だ、癪だ、癪だ」と唱える

とよい。すると「癪」と一緒になる。面白いことに、漬桶が甘柿に転ずる。「煩惱即菩提」というのがそれです。

無縁の時代に

誰でも年をとると死ぬことが気になります。後継ぎがいるか、墓は誰が守ってくれるのか。しかし子どもがいても、

墓を永遠に守れるわけではない。總持寺にもたくさん墓があります。私の直感ですが百年たっても子孫に守られているのは1割ぐらいでしょう。百年という4代ぐらいになる。いまの時代、4代以上も同じ場所に住んでいる家がどれだけあるでしょうか。やがては無縁墓になります。

日本人にはお骨に対する絶対的な信仰があります。ヒマラヤで死んでも、お骨が見つかるまで探す。お骨が帰って始めて安心します。また、「死んだら土にかえる」という思想も日本人にあります。現代はさまざまな形式の墓が流行っています。そのような変化の中でも、土にかえるという思いは残っていて、それは、宇宙の構成要素に帰ること、生まれたところへ帰ること。信仰にも似た日本人の情操です。合葬墓は世の中の流れです。個人で墓を建てるのが少なくなるでしょう。「あんたのこは一戸建だな」そんな会話が聞こえてきそうです。



プロフィール

いたばし こうしゅう

昭和2年、宮城県多賀城の農家の長男に生まれる。旧海軍兵学校7日期。東北大学宗教学卒業後仏門に入る。大本山總持寺筆頭、同知院後堂、大乗寺専門道場室長をつとめ、現在、大本山總持寺貫首。

歩いては旅路の果ての笑顔かな

この道のどこまで行ける
旅の鳩

放蕩三昧、世の中の酒も女も全部自分のものと踊り暮らしてしまいました。借金まみれになっても、芸人は舞台の上で受けりやなんぼでも巻き返しがつく。いまはウロコを隠しておいて、充電してパワーをつけて出ようと思ってきました。そんなときに、ガンの宣告です。39歳でした。

こりゃ人生の巻き返しもムリやなあ。ホームランさえ打てたら逆転できる思うてたのが、バッテリーボックスにも立たれへん。自責の念だけが心の中に渦を巻く。死の恐怖で眠れ



プロフィール

しょうひくてい こまつ

昭和32年滋賀県草津市生まれ。本名宮川 康二郎。草津中学卒業後、15歳で6代目笑福亭松鶴(故人)に入門。平成8年悪行性胃がん(ステージⅡb)と診断され、胃と膵臓を全摘出。すい臓の2分の1摘出手術を受ける。平成10年日本列島徒歩縦断を決定。2月17日鹿児島県庁前を出発。6月29日北海道庁前に舞臺ゴールインした。

何日かかっても、
どないなっても、鹿児島
島県庁から北海道庁

時雨では私に
似てる濡れすずめ

私と似ているな。よし
シジャパンの散歩や。

ない。真つ暗闇の出口のない迷路。なんでこんなに涙ばかり流して泣いてんねやろ。このまま死んでる場合やない。お父さんガンになったけど泣きながら死んでいったんやない。最期ぐらい天晴れに生きてたという姿を子どもに見せておきたい。

いろんな人の生き方や死に方を乱読した。最後に出会ったのが山頭火でした。この人の句は悲しいけど、すごいなと思った。妻子を棄て、しがらみを棄て、死に場所を求めて旅に出る。行乞(いびき)してるのに酒飲んで反省ばかり。美しいだけでなく、いやらしいだけでなく、人間らしいな。

まで歩いての一人旅。いままでの人生なにかやっつては途中で止めてる。今回は命を賭けよ。絶対止めたらあかん。結局130日かかった。死にかけたことも何度かありました。

誰にもいわずに歩いているのに、どこで聞きつけたのかガン患者の集いとかホスピスの生と死を考える会とかから講演の依頼がきた。患者70、80人を前にしゃべりました。「いつまでも泣いてる場合とちやいまっせ。とりあえず生きましょや。私も5年生存率15パーセントいわれたけど関係ない。医学でも科学でも究明でけへんのが生命力や、人間の魂や。身体はガンになろうとも、心に笑顔、気持健康や」

岡山では伊丹仁朗というNK細胞の活性化を勧めているドクターに落語を頼まれました。笑わそうとかではなしに、聞く人の腹に抱きつきにいく。笑う人は大笑いするし、泣く人は号泣する。いままで経験したことのない眼、空気が、熱気。この人たちは飢えてはんねや、寂しいんや。生きる勇氣と温

もりを求めてはるなと思いましたが。「ガン克服落語会」はこうして始まったのです。

生かされて
今日を輝く命かな

一期一会。ひとつの出会いが人生を変えることもあります。二度と出会うことのない出会いに命を賭ける、列島歩き一番の収穫はそれでした。「もう会えないかもしれないけど、今日のこの出会い、一人ひとりに命の限り小松の雄叫び聞いてもらいまっせ」と入っていくから、向こうも真剣でした。

1回目の出会いは袖振り合(そでぶりがひ)うも他生の縁。それが昂じてきたら合縁奇縁。さらに昂じたら縁は異なるもの味なもの。それがもつといたら腐れ縁。それを通り越したらえにしとなる。縁は嬉しいもんだ。ほんまにしみじみ体験しました。

人間で愚かなもんです。有るときはそのありがたみはわからない。無くしてはじめてわかる。「健康が一番でっせ。健康のためやったら死んでもよろし」

「死」は自分で「創る」ものになってきた

いまが浄土ではないか

昔の年寄りには「浄土に行きたい」といっていました。しかし、いまは浄土のイメージそのものが見えなくなっています。「いまが浄土ではないか」という人さえいます。毎日それなりに楽しく、豊かに暮らしています。飢餓や貧困もなく、とりあえず生きていきます。

親鸞や道元の頃は、打ち続く戦乱の世の中。戦火に家は焼かれ、道端に人が倒れ、食べるものも満足にないという状態でした。それと比べれば、まさにいまが浄土のように見えます。しかし、よく見ると

物質的には浄土でも、精神的には地獄かもしれませぬ。

そのなかでどう生きて、どう死んでいけばよいのか、誰にもわかりません。世界の歴史を見渡してみても、どこにもモデルがありません。いま、そのよりどころが、お寺を代表とする伝統宗教に求められているのではないのでしょうか。

新しい縁をつくる場

お寺はただお葬式の場所ではなく、新しい縁をつくる場所として原点に帰ることが求められています。都市化が進

多くなります。そうなる

死んでいくときもひとり、どうしようもない寂しさもあります。人は誰しも、どこかにつなげていくものを探します。遠い親戚より、同じ気持のつながる仲間です。

いまこうした家族を超えたつながりが求められています。「無縁」というと「無縁仏」とか連想して寂しいようですが、「無縁」という新しい縁こそがこれからの時代にふさわしいのかもしれない。先祖代々というタテの意識が薄れて、ヨコのネットワークが広がってきました。「一緒にあの世へ行こうね」というイメージ。それを受け止めるのが合葬墓ではないでしょうか。

増えるか生前交流

死は自分ではどうしようもないものです。意識がなくなったらその先は他人任せ、死んだら誰かが始末してくれる

ものでした。しかし、いま少子化のなかで、「死」も自己責任の時代になってきました。「死」まで自分で創る時代といえるのかもしれない。

生きていくあいだに死後のことまで取り決めてしまうという生前契約が注目を集めています。契約する人の8割が女性だといいます。女性たちは、法事から介護の世話から、最期の看取りや始末まで、すべて自分たちでこなしてきました。それだけ、自らの死を具体的に考えてしまおうのでしょうか。

合葬墓は「無縁の縁」を創るもの。だったら、墓をきつかけに、生前の交流を求め、人たちが増えてくるかもしれない。お寺は、死をめぐる講習会や相談会が開かれ、晩年をどう生きるか、悩みを話し合う場となります。それは生前からの仲間意識と安心感を醸成し、同時にひとつの救いの場ともなるはず。



プロフィール

いけだ ともたか

昭和24年熊本県生まれ。早稲田大学政経学部卒。毎日新聞社入社後、社会部、学芸部副部長、東京本社生活家庭部編集委員などを経て、現在、大阪本社社会部編集委員。著書に「日本人の死に方」(実業之日本社)など。

合葬墓（永代供養墓）のこれまでとそしてこれから

**合葬墓はどうして
生まれたか**

80年代の後半に仏教寺院を中心に「永代供養墓」が現れた。これが従来の墓と大きく異なるのは「跡継ぎを必要としない墓」である点であった。

明治末期以降、それまでの個人墓に代わり家墓が日本の墓の主流となった。家墓は家族が共同で埋骨される形態であるが、同時に家の祭祀の中心に位置づけられるものだった。

この家墓は、家の祭祀を主宰する者、つまり跡継ぎにより継承されるものであった。

別な言い方をすれば、跡継ぎのいない人は家墓をもてず、これまでの家墓は無縁となつて処分される運命にあった。

だが、戦後は家族形態が大きく変わった。核家族となり、生き方も多様となった。従来の「イエ（家）」という枠内では、生き方も、墓も統制することは不可能となった。

そこで現れたのが永代供養墓（合葬墓）である。

**合葬墓は
いかにあるべきか**

永代供養墓あるいは合葬墓は、家という枠ではなく、それぞれ

の生き方を尊重し、誰もが等しく葬られる権利を保障するために作られた。従来の家族

に代わり、寺が責任をもって文字どおり永代に供養しますと宣言した墓である。多くの場合、個墓の形態をとら

ず共同墓の形態をとるので「合葬墓」ともいう。

無縁塔とは異なる。無縁塔は、跡継ぎのいない人のための、かわいそうな無縁の人のための墓であるが、これとは精神が異なる。

生き方が多様な時代にあつて、それぞれの生き方を尊重して、全ての人に対して開かれた墓という意味である。

一人ひとりの意思の尊重であるから、本人の意思であることが大切である。次に重要なのは「新しい縁づくり」である。それは生前からの寺との縁であり、一緒に入る者との縁である。寺が人々の生き方と結び合うことである。これが墓に入る者の信頼を形づくる。

そして重要なことは、家族や関係者の用いを排除するものではなく、それぞれの自由意思において用う権利を保障することである。

ある人が「墓参りを（義務）から（権利）へ」と言ったが、

人との関係、死者との関係を生きたものにする、それが永代供養墓（合葬墓）なのである。

合葬墓の将来性

65歳以上の高齢者がいる世帯で、跡継ぎとなる子のない世帯は15.8万世帯。高齢者のいる世帯総数の約1割である。子がいても子と同居していない高齢者世帯が約500万世帯と高齢者のいる世帯の約3分の1を占める。

現在は核家族が最も多いが、2020年には単身世帯が最も多くなるとの予測もある。家族分散の時代に入りつつある。一部の者ではなく誰もが無縁候補者となる時代である。

寺も墓も、多様な個に視点を置いた開かれたものになっていくことが求められる。その起点の一つが永代供養墓・合葬墓であろう。



プロフィール

ロマンや はじめ

昭和21年岩手県生まれ。雑誌「SOGI」編集長。著書に、「葬儀と法要の手帳」（小学館）、「自分らしい葬儀」（小学館）、「お葬式の学び方」（講談社）、「葬儀総論」（表現文化社）など。現在京都府京都市に在住。「たよならのデザイン」を運営中。

生前契約は老後の安心を買うシステム

生前契約事業に取り組み

宝塚NPOセンター事務局長 森 綾子



プロフィール

もり あやこ

翻訳ボランティアやガイドヘルパーを経て、昭和62年に宝塚市社会福祉協議会のボランティアコーディネーターに就任。8年後の震災で市役所内にボランティア本部を設立。平成10年市民活動を支える民間NPOセンターを設立し、事務局長に就任。

阪神淡路大震災をきっかけにボランティアが変化し、各地でNPO（非営利活動法人）が生まれました。私は（特）宝塚NPOセンターの事務局長として、地域のNPOの立上げや運営を支援しています。同時に「めふのお家」の副代表も務めています。「めふのお家」は痴呆性高齢者のためのデイサービスとヘルパーの派遣を行っていましたが、昨年10月から生前契約事業を新たに開始しました。

後の心配をしているのは、子どもでもない夫婦や独身の女性だけではありません。親戚や知人に頼らず自分らしい死をまっとうしたいと願っている人も大勢います。生前、意識がしっかりしているときに死後の計画を立て、お金を預けておくシステム。それが生前契約です。死後の計画を遺言通りに実行するのが「めふのお家」なのです。

すでに50名の方が登録

発足してまだ半年ちょっとですが、すでに50名の方が登録され、遺言証書まで作成した方は23名になります。そのうちお一人が残念ながら3月に亡くなられました。私どもにも来られるのは半分以上がシングルの方です。年齢的には、30歳代から50歳代まで。夫が亡

くなった、離婚した、子どもがいるので自分が万一死んだときは後見してくれないかとか、いままで一人で生きてきてもう結婚しない、仕事をしてお金もある、兄弟もいるけど迷惑を掛けずきちんと死んでいきたい。そんな相談が多くあります。

お葬式は自分らしいものにしたかったので、音楽葬にして花はこれ、着物はタンスの一番下に置いてあるのを着せてとか、楽しく企画されます。契約すると、一様に安心されます。「これで思いきって旅行に行けるわ。全部使って死んじゃお」寄付先も決めて、女性のほうが思い切りがいいようです。

お墓に対する意識は変わってきた

私は15年前、女性学を研究して、「女と墓」というテーマで論文を書きました。当時女性性は結婚したら先祖代々の墓

に入らないといけないと思っていました。調査すると嫌がっている人がたくさんいました。その頃から比べると、自分の好きなどころへ入れるというのがわかってきて、女性の考え方も変化してきました。

これからは、個人墓をいくつも作るより、誰でも入れる永代供養墓を作ることが必要です。宝塚周辺でも山を切り開いて霊園を作っていますが、環境上よくありません。

永代供養墓というと、昔は家族のいなさびしい雰囲気がありました。いまはいつもたくさんの人がいて、社会的な認知を得たのではないのでしょうか。そこに入ったら、いつも誰かがお参りに来てくれるし、みんなが大きな家族みたいになれるような気がします。そのためにも息子の無い、親しみのある温かい空間であってほしい。それなら私も入りたいたいと思います。

ともに眠る安らぎと喜びを感じて

女の碑を建てて

夏草や嵯峨野に美人の墓多し

正岡子規

京都の嵯峨野には美しい女性にまつわる史跡が数多くあります。小督の局や祇王祇女、横笛、夕霧太夫など、物語や謡曲としても数多く残されています。

この嵯峨野に私たちも心ひかれて、小倉山の常寂光寺に「女の碑」を建立させていただきました。その碑には、故市川房江さんの筆で「女ひとり生き、ここに平和を希う」と刻まれています。

第二次世界大戦では多くの

若い男性が戦死しました。その

結果、当時年頃だった娘たちは、結婚相手を失い未婚のままの人生を余儀なくされたのです。その数は数十万人を数えました。そうした戦争独身の女性たちが集まって建てたのが「女の碑」というわけです。

女の碑の会では、戦争に反対し平和を願う思いを、ひとりでも多くの若い人たちに伝えたい。そして二度と戦争を起さないようにしてもらいたいと願っています。

念願の志縁廟も

しまひよう

いました。

幸い常寂光寺でその願いを受け入れていただきました。女の碑から10年後、平成元年に納骨堂「志縁廟」が女の碑の後方に完成。女の碑に向かって手を合わせると、志縁廟を拝むこととなります。会員たちも資金を募り、1800万円近くを負担することができました。

志縁廟は、36平方メートル、ひのき材の瓦葺き寄せ棟造り。地下に直径30センチ、深さ2メートルの井戸状の納骨所が4つ作られ、そこに散骨します。堂内の棚には小さな位牌が並んでいます。俗名のままで、生きているあいだは赤、死ぬと白に変わります。最初は「生きていられるのにお位牌なんて縁起でもない」と反発されなかつたかと思いましたが、逆に皆さん喜んでいました。

死を受け入れる

死を受け入れる

会員が850名になったところで締め切りました。戦後生まれの人も入っています。「お墓が決まって、これで安心して働けます」。戦中世代も「これで安心して老後を楽しめます」という。思いは年代にかかわらず同じです。自分の最期をきっちりすると、安心して前向きになれるようです。

1年に1回12月8日の開戦記念日前後の日曜日に法要を行ってきました。その1年の間に亡くなった方を合同で追悼し、合わせて旧交を温めています。それぞれにいろいろなグループもできてきました。新しい縁をつなぐいい窓口になれたと喜んでいきます。

私自身も、この会の運営を通じてさまざまな勉強をさせていただきました。自分の死を受け入れやすくなりました。死ぬことに何の抵抗もありません。皆さんと一緒に骨がひとつになつて眠れるのかと思うと、とてもやさしい気持ちになります。あちらに行っても仲良くしてくださいように。



プロフィール

山岡 嘉代子

大正15年大田市生まれ。関西学院大学卒業。大阪市立大学、大阪府立看護学院、花園大学教授などを歴任。昭和54年女の碑の会を設立。

女の碑が完成したのが昭和54年でした。女の碑の会は96人の会員からスタートしました。彼女たちは、ひとりでは生きにくい時代の中で、自分の生活を自分の手で築いてきました。そして、同じように生きてきた仲間同士で、この嵯峨野に共に眠れる墓所を作りたいと願

よりよく生きるために

合松山

臨南寺住職

渡邊剛毅

土に還る

もともと農耕民族として生きてきた日本人は、自然を愛する民族といえます。「死んだら土に還る」という思想もそのひとつでしょう。還るといふ言葉には、「人も自然の一部である」「大地と一体になる」という宇宙観が強く感じられます。

しかし、少子化、都市化の急速な進行とともに、土に還ることも怪しくなってきました。まず、身近にお墓を建てるのが難しくなってきました。次に、お墓を建ててもそれを承継してもらえないかどうかはわからなくなってきました。

お墓は要らない？

「葬儀もしない。お墓も要らない」という方も増えています。しかし、



葬儀もお墓も、故人のためというより、身内を亡くし

た遺族の哀しみや喪失感を癒す働きの方が大きいように思われます。

不思議なもので、お墓に参り、故人の冥福を祈って手を合わせていると、心が浄化されるような感覚を味わうことが少なくありません。やはりお墓は、生きていく人にとって、「心を癒す場所」といえるでしょう。

生きるためのお墓

生きることは、死を考えることから始まるといわれます。死は必ず誰の身にも起こることで、病氣などによって、「あなたの命はあと一年しかありません」といわれてはじめて、生きることに真剣になる。元氣なうちに真剣に生きておけばよかったと、時々耳にします。

お墓について考えるのは、いわば自分の死を現実のものとし

て考えることでもあります。自分の墓を決めた人が、「これで安心して生きられる」と喜ばれるのは、そのあたりの事情を物語っています。

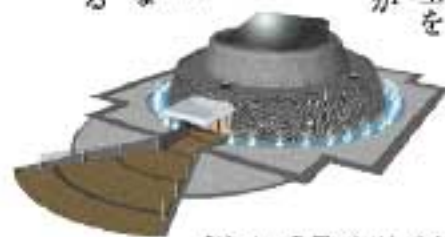
生前の交流を

「家」の意識が希薄になり、お墓も「先祖代々」のものから「個人」のものに変わってきました。

「無縁の縁」という言葉があります。血のつながりが血縁。同じ土地に住むと地縁。人と人のえにしは、もともと縁のないところから生まれた無縁の縁です。

お墓は死んでから入るものですが、同じお墓を共有するところから生まれる、生前交流もなかなか味があります。

まさに「縁は異なるもの味なもの」といえるでしょうか。



「がっしょう 圓マトリ」イメージパース

編集室から

かねてより臨南寺境内に建設中でした合葬墓「がっしょう 圓マトリ」が、竣工の運びとなりました。建設中は、何かとご不便、ご迷惑をおかけしましたことを心よりお詫言ひ申し上げます。

「マトリ」とはチベット語で「母」という意味です。母のふところに抱かれるような、永遠の安らぎを祈念する想いが込められています。

都市化、少子化が進むなかで、「家」の意識が薄れてきたいま、お墓に対する考え方も変わってきました。「がっしょう 圓 マトリ」は、これからお墓のあり方に一石を投じるものと思われたい。

今回の「ほ〜っと特別号」は、これからのお墓のあり方について、各界の著名人にご意見を伺いました。ご参考になれば、これに優る喜びはありません。

「ほ〜っと」特別号

平成13年6月

発行：榎園林
(りょうがりん)

〒546-0034

大阪市東住吉区長谷公團1-32

☎0120-711-493

TEL 06-6698-1001

FAX 06-6697-3330

Eメール

ryougarin@shunden.co.jp